

# Jazzと連携したインターフェース開発から 日本発エンタープライズ・アジャイルの可能性を提示



株式会社チェンジビジョン（以下、チェンジビジョン社）は、「見える化」を促す開発支援ツールを提供するソフトウェア・ベンダーです。2008年からは日本アイ・ビー・エム株式会社（以下、日本IBM）との協業関係を構築。IBMが推進するコラボレーション開発支援プラットフォームの開発プロジェクト Jazz™ 初の製品である IBM Rational® Team Concert のユーザー・インターフェースを開発しました。その結果、ソフトウェア開発効率を格段に向上させることに成功し、お客様のニーズの変化に迅速に対応するアジャイル開発の可能性を大きく拡大することとなりました。

## Interview ①

## From the Development of an Interface that Links with Jazz Displaying the Possibilities of a Japan-developed Enterprise Agile

Change Vision, Inc. (hereafter, Change Vision) is a software vendor that provides development support tools that promote “visualization.” It has constructed a cooperative business relationship with IBM Japan, Ltd. (hereafter, IBM Japan) since 2008. It developed a rich user interface for IBM Rational® Team Concert, the first product in the Jazz™ development project for collaboration development support platforms that IBM is promoting. As a result, it has succeeded in improving software development efficiency by a considerable amount, and has significantly expanded the possibilities of agile development that responds rapidly to customer’s changing needs.

## 日本発のソフトウェアを世界に

チェンジビジョン社は、「変わるための見える化」「革新のビジョン」という二つの意味が込められた社名が示す通り、2006年の設立以来ソフトウェア開発やプロジェクトマネジメントにおける「見える化」を促す開発支援ツールを提供し、ビジネスに「革新」を起こすべく事業を展開してきました。

「多くの方に喜ばれるソフトウェアを作って、それを使っていたらということに大きな生きがいを感じています」

こう語るのは同社代表取締役 社長 平鍋 健児氏。平鍋氏は鉄鋼メーカーで三次元 CAD のソフトウェア開発を6年ほど経験。1995年から地元である福井のIT企業に移り、現在も同社の副社長を兼任するなど、一貫してソフトウェア開発の現場で精力的に活動を続けてきました。その後2006年にはチェンジビジョン社を設立。その設立にはもう一人、それまで大手ソフトウェア・ベンダーやソフトウェア開発に対するコンサルティング・ファームでのマーケティング業務を歴任してきた同社取締役 COO 熊谷 恒治氏が寄与しています。以来、チェンジビジョン社は技術を担当する平鍋氏、マーケティングを担当する熊谷氏の両輪によってソフトウェア開発業界において確実な地歩を固めてきました。

平鍋氏は日本のソフトウェア開発の現状、そして2006年のチェンジビジョン社設立に至る経緯を次のように語ります。

「国内で流通しているソフトウェアにはさまざまなものがありますが、日本がアメリカに対してのソフトウェア輸出入比率は1対100といわれています。私はこうした状況をなんとか打開したいと考えています。現在、日本企業によって行われているソフトウェア開発の中心は受託開発

株式会社チェンジビジョン  
代表取締役 社長

平鍋 健児 氏  
Mr. Kenji Hiranabe

President  
ChangeVision, Inc



です。しかも多くの方の努力が注がれている中で、開発だけで収益を確保できる企業は少なく、人材派遣やコンサルティングを兼業されているというのが現状ではないでしょうか。しかし、日本のエンジニアの技術レベルは非常に高く、世界でも負けることはないでしょう。そんな思いから、大きな可能性を秘めた日本発のソフトウェアを世界に流通させることを目的として設立したのがチェンジビジョン社なのです」(平鍋氏)。

平鍋氏によれば、日本でのソフトウェア開発における問題は日本人がコンセプト・メイキングを苦手としている点にあるとのこと。それを克服するためにチェンジビジョン社が選択したのは、トヨタ生産方式でした。つまり『見える化』や『かんばん』といったジャスト・イン・タイム生産システムを活用することで『アジャイルなソフトウェア開発』を実現し、市場のニーズを集約できるコンセプトを持ったソフトウェアの開発を促進するというものでした。

アジャイル開発とは、プロジェクトを小さな機能ごとに分割して開発、テストまでを行い、その流れを反復・漸進していくことで開発にかかるリスクを最小化する手法(図1)ですが、そこではプロジェクトの「見える化」が必要となります。設立以来アジャイル開発を推進し、一貫して「見える化」を行うためのツール開発を行ってきたチェンジビジョン社は、同じ「見える化」の仕組みを活用したソフトウェア開発プラットフォームである「Jazz」を通じて IBM と出会い、両社にとって一つの節目となる協業関係が始まりました。

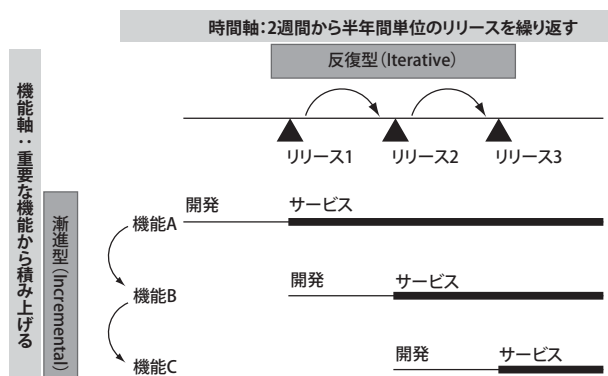


図1. 反復+漸進を繰り返すアジャイル開発



株式会社チェンジビジョン  
取締役 COO

熊谷 恒治 氏  
Mr.Koji Kumagai

Director and chief operating  
officer  
ChangeVision, Inc.

## アジャイル開発のスケール・アップへ向け 日本 IBM とのコラボレーションを開始

チェンジビジョン社では、設立当初からソフトウェア開発チームのプロジェクトマネジメントを見える化するツールとして TRICHORD (トライコード) という製品をリリースしてきました。TRICHORD はプロジェクトを「とき」「ひと」「こと」の3要素に分け、シンプルなインターフェースによって開発者の直感的な理解を促し、プロジェクト全体の生産性と協調性を高めるツールです。「我々は TRICHORD に拡張性をもたせ、分散開発環境へと展開する方向性を模索していました。その際には外部にデータベースを置くことや、ほかの製品と連携するという考え方が必要となります。そこでさまざまな他社製品を調査していたところ、IBM の開発した『Jazz』を知ることになったのです」(平鍋氏)。

さらに、熊谷氏は当時の状況を振り返ります。

「IBM の説明では、今までの開発チームを閉じた世界と表現するなら、それをもう一つスケールの大きなもの、インターネット・ワイドへと変革させようと計画していて、そのコンセプトを実現するのが『Jazz プロジェクト』だということでした。これは主に小集団で行われるアジャイル開発を大規模開発へと適用させていくことなのですが、聞けば IBM は今後本格的にアジャイル開発の方向に進んでいくとのこと。そこで我々は、Jazzこそ TRICHORD と連携するのに最適なプラットフォームであると考え、IBM との協業に踏み切ったのです」(熊谷氏)。

またチェンジビジョン社は、今年8月に米国フロリダ州オーランドで開催された Rational Software Development Conference (RSDC) 2008 に日本の

独立系ソフトウェア・ベンダーとして初の参加を果たしました。そして IBM Rational® Team Concert 用に開発した TRICOHRD のユーザー・インターフェース (UI) を持ち込んでのアピールや、Jazz Live でのデモ・ブース開設によって多くのフィードバックを得ることに成功しました。その後も日本 IBM が主催する連続セミナーである「渋谷テクニカルナイト」において講演を行うなど、IBM との協業関係を積極的に構築しています。

## IBM が提唱する アジャイル環境の開発プロジェクト「Jazz」

Jazz とは IBM が Eclipse\* で見たアジャイル・プラクティスの成功をもとに、世界中に分散した開発者の協調を促し、効率的なソフトウェア開発を行うことを目的として進める IBM Rational の製品開発チームと IBM Research 部門の共同プロジェクトの総称、およびそのツール群の名称です (図2)。

※ Eclipse : IBM が Java™ をベース言語として開発した、プラグイン (標準では備えていない追加機能を提供するための小さなプログラム) による拡張性を備えたオープン・ソースの開発プラットフォーム。個々のユーザーのマシン上で動作するクライアント・アプリケーションの開発を目的としている。

Jazz プロジェクトは、お客様やパートナー企業に対して開発中のソース・コードやプロジェクトの進行状況を公開する Community Driven Commercial Development (CDCD) と呼ばれる開発スタイルで進められます。一般に公開されたオープンな環境下でのソフトウェア製品開発という試みが行われ、運営方針としては以下の四つを基本としています。

### ■ イノベーション

開発者間のコラボレーションを支援し、ソフトウェア開発に革新をもたらすプラットフォームを提供

### ■ Eclipse Ways

Eclipse の開発で実践されたプラクティスによって、小規模案件での有効性がうたわれているアジャイル開発中・大規模案件へ適用するためのツールを開発

### ■ コミュニティ

商用製品の開発にお客様を含めた多くの Jazz ユー

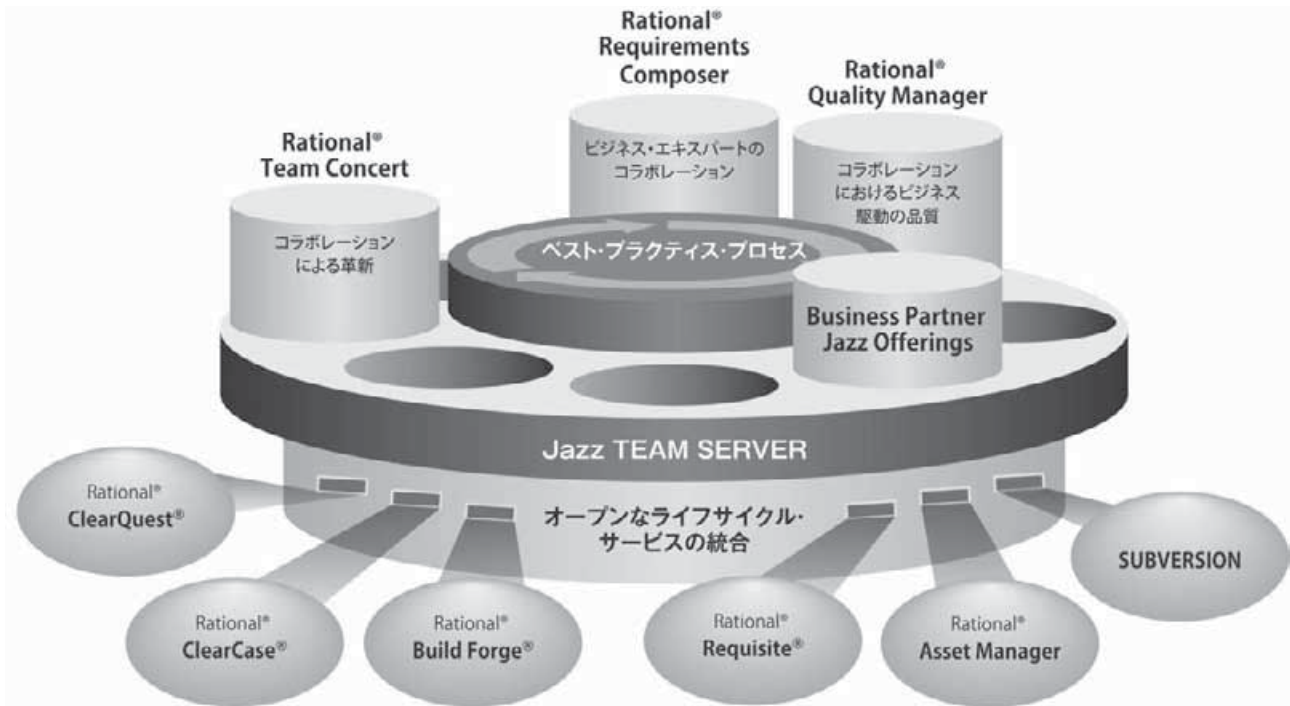


図2. Jazz関連製品群

ザーの意見を取り入れるため、開発中のコードを Jazz プロジェクトの Web サイト Jazz.net (<http://jazz.net>) で広く公開

### ■ ビジョンの実践

Jazz プラットフォームの開発自体に Jazz を活用し、そこで得た知見をコミュニティーやプロジェクトに対してフィードバック

そして、Jazz によって開発された最初の商用製品が、Rational Team Concert です。これは地理的に分散した開発者同士の協調を可能にするコラボレーション・ソフトウェアで、プロジェクトの透過性の向上やプロジェクトへの開発プロセスの適用を支援します。

## プロジェクトの直感的な「見える化」を シンプルなインターフェイスで実現

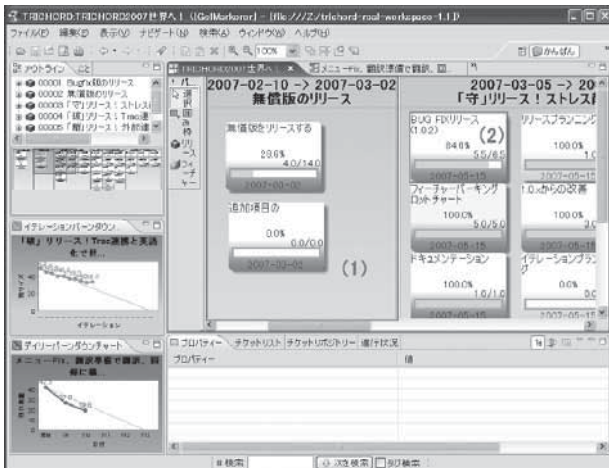
チェンジビジョン社が TRICHORD を開発したきっかけは、プロジェクト・チームが抱えるタスクや進捗状況、そのほかの問題の見える化を行うことで、チームの生産性と協調性を高めることができると考えたことでした。アジャイル開発が注目され始めた現在でも、ソフトウェア開発の現場では一般的にウォーターフォール型の開発手法

が採用されていますが、平鍋氏はウォーターフォール型開発の限界について次のように語ります。

「ウォーターフォール型の開発では、まずユーザー企業の中で詳細な要求仕様が決定されます。ソフトウェア・ベンダーはその仕様書をもとにガント・チャート（プロジェクトのスケジュール管理に利用される表）を作成し、ワーク・ブレイクダウンを行うと、プロジェクト自体がうまくいくように錯覚してしまいがちです。しかし実際の開発は人間が行うものですから、すべての作業がそのチャートの通りにいくとは限りません。むしろ個々のプロジェクト・メンバーが互いに補完し合い、協調しながら一つずつ作業が進んでいく、というのが普通だといっていいでしょう。一方、アジャイル開発ではプロジェクトを細かい単位に分け、全体の進捗状況や小さな問題に見える化する手法です。TRICHORD が目指したのは、プロジェクトの情報共有ボードとなる UI の提供によって開発者の協調性を格段に向上させ、アジャイルな開発を実現することでした。ここでいう協調性とは『あ・うんの呼吸』と言い換えることができますが、これは本来、日本人が一番得意としているはずですが、我々は TRICHORD によってこれをサポートしたいのです」（平鍋氏）。

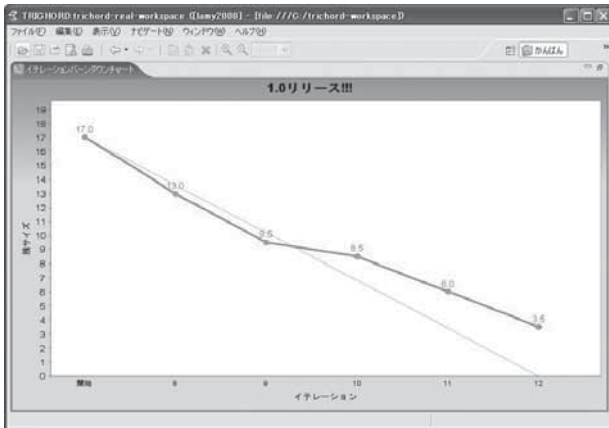
TRICHORD は、「かんばん」「バーンダウンチャート」「ニコニコカレンダー」の三つの主要機能（図3）によってプロジェクトを見える化し、生産性の向上を図るという

■ かんばん



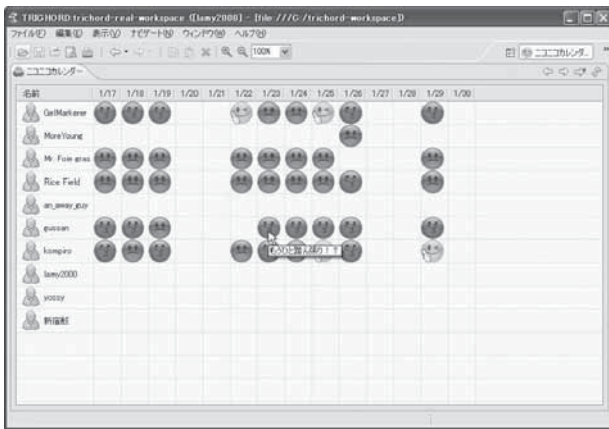
直感的な状況把握や操作が可能なかんばん機能は、タスク、タイムボックス、リリースという三つの時間単位における作業の進捗状況を見える化。

■ バーンダウンチャート



残作業量を視覚化する右下がりのグラフ。縦軸に残りの作業量を、横軸に時間を割り当て、日々の残作業量をプロットしていくことで、必要な作業時間数を見える化。

■ ニコニコカレンダー



プロジェクト・メンバーの現在の気持ちを色付きのスマイル・アイコンと一言コメントで表現し、チーム全体の雰囲気を見える化。

図3. TRICHORDの主要機能

コンセプトのもとに開発されたツールです。「かんばん」とは、日々のタスクや任意の期間、さらにはリリース単位で区切られたプロジェクトの進行状況を直感的に把握するためのツールです。「バーンダウンチャート」は横軸に時間、縦軸に残りの作業量を割り当てて残作業量を視覚的に表示します。三つ目の「ニコニコカレンダー」はプロジェクト・メンバーの気持ちを色付きのスマイル・アイコンとコメントで表現することで、チーム全体の雰囲気を把握することを可能にします。

一方 Jazz は、IBM がオープン・ソースの統合開発環境として一つの成功を見ていた Eclipse をベースに、ソフトウェア開発チームのさらなる生産性向上を目指して開発したプラットフォームやそのプロジェクト全体を指します。その名称は音楽のジャズが独立した奏者の協調によって演奏されるというイメージから付けられたものです。ここから分かる通り、TRICHORD と Jazz は「開発チームの協調」を促すという点で根源的に同一の方向性を持っていました。そして双方が対象とする開発規模の違いがあったからこそ、TRICHORD と Jazz の連携の可能性を見出すことができたかと熊谷氏は説明します。

「Jazz のプラットフォームで開発されたコラボレーション・ソフトウェアである Rational Team Concert にも既存の UI がありますが、それはどちらかというところエンタープライズ開発の全体を管理するというポリシーのもとで開発されたものだととらえています。世界中で分散開発されるプロジェクトの要求・設計・コーディング・データ管理・タスク管理といった一連の動作をスムーズに行えるように設計していますが、UI 自体は全体を把握するためのリスト的な形をとっています。それに対して TRICHORD の UI は一つのチームにフォーカスし、一人ひとりのエンジニアが最も多く使うであろう部分をいかに直感的に理解してもらうかということを目指したものです。そこで我々は、Rational Team Concert が追求したスケーラビリティと TRICHORD が目指した見える化が両立できれば、ほかに例を見ないほどの有効なコラボレーション・ツールになると考えました。Rational Team Concert と TRICHORD はまさに補完関係にあるといえるでしょう」(熊谷氏)。

チェンジビジョン社が Rational Team Concert 用の UI 開発に着手したのは 2008 年 4 月。RSDC 2008 での Rational Team Concert 公式発表を終えた現在も続く開発作業ですが、それは Jazz の構造自体を探ることから始まったと、熊谷氏は続けます。

「我々はJazzを、発表されたばかりのころから触っていましたが、とにかく中身を調べながら作っていく必要がありました。自分たちで調べたことをベースにして、コンセプトも開発マナーもそこから発掘していくという感じで、そういった部分では苦勞もあります。特にJazzはプラットフォームですので、Jazz自体が開発された意図をうまく読み取らなければ正常に動作はしてくれません。当然ながら今までのTRICOHARDでの考え方がそのままでは通用しない部分もあります。またJazzが将来的に変更される可能性もありますので、それを見越して可変性を保つということが最大の課題になっています。そんな困難を一つずつクリアし、形になったものを米国のIBMに持っていったときには、どうやって調べたのかと驚かれました」(熊谷氏)。

こうしてアジャイルというキーワードを介して協業を開始した両社ですが、この協業にはもう一つの背景がありました。近年、IBMはソフトウェア開発の現場で活躍するデベロッパー、テクノロジー・デシジョン・メーカー(TDM)に対するアプローチを強化するため、各種セミナーを開催するなど、情報提供活動を行ってきました。そうした中、アジャイル開発を力強く推進するチェンジビジョン社の持つTDMとの強い絆はとても魅力的なものでした。また、熊谷氏も逆の見地からのメリットをIBMとの協業に感じていたと話します。

「チェンジビジョン社が設立当初から行ってきた『見える化』というビジネスは、そもそもアジャイルを広めたいという思いが根底にあるものですから、ボトム・アップ型とっていいかもしれません。そのため、企業ワイドで何らかのツールを導入しようと判断できるビジネス・デシジョン・メーカー(BDM)にアクセスできるパスを探してきました。IBMはBDMとのつながりがとても強い企業です。我々としてはそこにも注目しています。」(熊谷氏)。

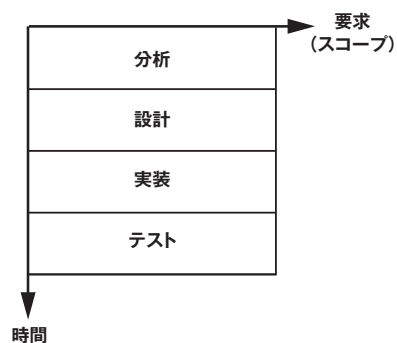
そういった意味でも、チェンジビジョン社とIBMの協業は補完しあう関係にあるのです。

## 市場の変化に素早く対応し、 ビジネス・チャンスを拡大するアジャイル開発

実は平鍋氏は、IBMがアジャイル開発の道を歩み始めたことに当初は驚いたと語ります。

「アジャイルはどちらかといえばエンジニアが自身の作業効率を上げたり、モチベーションを上げたりすることを

### ● ウォーターフォール型開発



### ● アジャイル開発

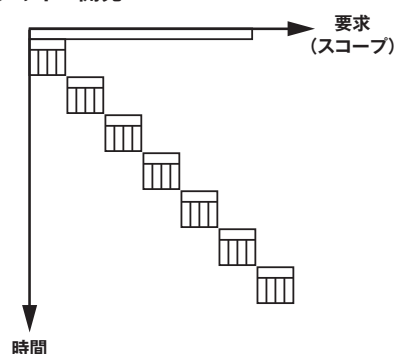


図4. ウォーターフォール型開発とアジャイル開発の比較

目的に始まったボトム・アップのムーブメントです。一方IBMといえばエンタープライズの開発を主に行われてきた企業です。それがオープン・ソースということも含めてこのムーブメントに参加され、アジャイルをエンタープライズ開発へと適用しようとされているのはとてもいい潮流だと思いました。管理と技術以上にエンジニアのハートを大切にしているということを知ってとてもうれしいのです」(平鍋氏)。

平鍋氏は2000年にケント・バック氏の『XP エクストリーム・プログラミング入門—ソフトウェア開発の究極の手法』(ピアソン・エデュケーション)においてアジャイル

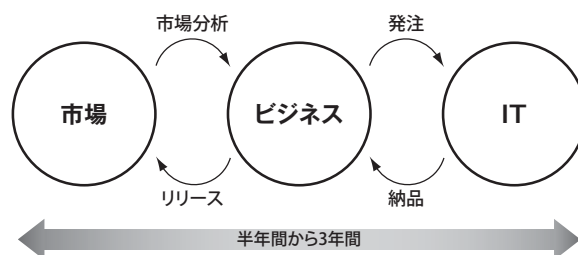


図5. ミッション・リスク分割型のビジネス・モデル

ビジネス側とITベンダー側でミッションとリスクをそれぞれ分割していたミッション・リスク分割型のビジネス・モデルでは、「変化することのない正しい要求」が存在することが前提となっている。

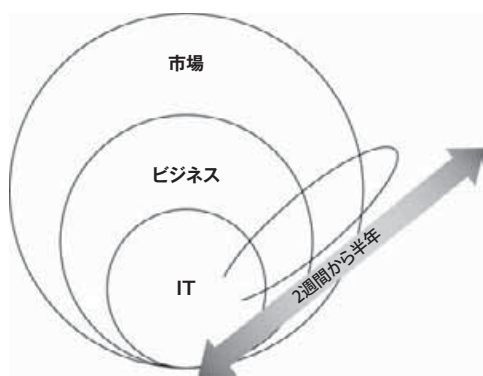


図6. ミッション・リスク共有型のビジネス・モデル

ビジネス側とITベンダー側が一体となってミッションとリスクを共有し、試行錯誤の結果をもとに戦略を練りつつ進めていく。

が発表されて以来、アジャイル開発は今後のソフトウェア開発の主流になると予期し、推進してきました。その中で、独自の見解を持つようになったといえます。

「ウォーターフォール型開発とアジャイル開発との違いは、ウォーターフォール型開発が初めにすべての要求をまとめ、その後一気に分析、設計、実装、テストという流れを取るのに対し、アジャイル開発では分割された要求のうち優先度の高いものから順に短期間（1週間から1カ月間）で分析からテストまでを行うということにあります（図4）。また、ウォーターフォール型開発においては市場、ビジネス、ITベンダーというソフトウェア開発の3主体がミッション・リスクを分割したビジネス・モデルを構成しています（図5）。このモデルではビジネス（ユーザー企業）が市場を分析して要求をまとめた後にITベンダーへ発注を行い、ITベンダーはそれを約半年から3年という期間をかけて開発して一括で納品します。ビジネス側は自らがまとめた要求がROI（Return On Investment: 投資収益率）を実現するものであるのかというリスクを負い、ITベンダー側はビジネスから提示された要求の通りに開発を行えたかに対するリスクを負うというように、ビジネス側とITベンダー側のリスクがはっきりと分割されています。しかし、ミッション・リスク分割型モデルを用いるウォーターフォール型開発が成功するためには「正しい要求が存在し、それは長期間変化することがない」ということが前提となってしまいます。これによってビジネス側は初めに要求仕様をまとめ、凍結する際に可能な限り多くの要求を詰め込もうとしてしまい、とすれば実際には使われない機能が作られてしまうという結果にもなってしまいます。これに対してアジャイル開発では、市場、ビジネス、ITベンダーの3者は入れ子

構造になり、ビジネス側とITベンダー側がミッションとリスクを共有します（図6）。このような開発スタイルの中では、必然的にビジネス・インパクトのあるものから先に作ることであり、ひいては不要な機能を発注する必要性がなくなります。これこそビジネス側にとってのプロジェクトの『見える化』といえるでしょう」（平鍋氏）。

また熊谷氏は、ビジネスにとってのアジャイル開発のメリットについて次のように続けます。

「アジャイル開発は短い開発スパンで反復・漸進を繰り返すことで、2週間から1カ月という単位で要求における問題点が浮かび上がってくるという特長があります。ユーザー企業はいつでも自らのビジネスの方向性を修正して市場の変化に対応したいと考えていますので、アジャイルは現代のビジネスに非常にマッチしています。またウォーターフォール型のように1年後の市場をターゲットにして要求をまとめたとしても、その機能が完成する1年後には、すでに市場は変化しているので、あまり効果を見込めないケースもあり、その時点で仕様変更してもまた時間がかかってしまいます。これを回避するためには市場を少なくともクォーターでとらえなければならぬ時代に来ていることは間違いないと思います。クォーターのリズムで開発する際、仕様変更もクォーターで行われるのは当然ですが、アジャイル開発ならばそれを受け入れることができるのです」（熊谷氏）。

## IBMとの連携の先に見据える 日本発のエンタープライズ・アジャイル

Jazzプロジェクトとの連携を通してIBMとの協業を進めるチェンジビジョン社ですが、平鍋氏はRSDC 2008へ参加したことをきっかけに今後のJazzの可能性を見出したといいます。

「Jazzはプロジェクト全体を内包する器を持っています。RSDC 2008のJazz LiveというコーナーではJazz上にさまざまなソフトウェアを乗せているベンダーが集まってデモをしている場面がありました。それはまさに音楽のジャズのようにベースがいてドラムがいて、それなら自分はギターを弾いてみるかという雰囲気です。これはJazzという共通のコンセプトを持ちながらまったく別の場所で別の意図をもって作られたソフトウェアがJazzというプラットフォームを架け橋とすることでつながっていることを意味していると思います。今はまだ発生していませんが、近

い将来、違う強みを持ったソフトウェア同士が Jazz を介して結合することで一つの新しい価値を生み出していく可能性を持っているのではないのでしょうか」(平鍋氏)。

本来、開発者同士の協調によって円滑なエンタープライズ・アジャイルを目指して始まった Jazz プロジェクトは、チェンジビジョン社が今後展開を目指す「エンタープライズ開発の見える化を実現する手掛かりにもなった」と熊谷氏は続けます。

「我々が掲げる『見える化』というコンセプトは、言い換えればプロジェクト全体をいかにビジュアルに分かりやすく、右脳的に表現するかということです。そして今、Web の環境がどんどんスタンダード化していますので、それを活用したインターネット・ワイドなソフトウェアの『見える化』を考えています。そうなるとこれまでクライアント・サーバー上での運用を前提として開発したソフトウェアも、Web をベースとしたものに変えていったほうがスクラビリティを得ることができますので、まずはそこから始めていくことになるでしょう」(熊谷氏)。

そして平鍋氏は、チェンジビジョン社が今後 Jazz との連携によってさらなる飛躍を遂げることを視野に入れていると語ります。

「先ほども言いましたが、我々の認識では我々のお客様と IBM のお客様は層の違いが大きいのではないかと、いうものがありました。そこに対してアジャイルという共通のメッセージを持てたことは幸運だと思えます。これからはアジャイルというメッセージをしっかりと両方の層へ届けることで、ソフトウェア開発業界全体を巻き込む一歩進んだムーブメントへと発展させて行きたいと思えます。米国のアジャイルはすでにある程度のポジションを確立しているとはいっても、まだスタンダードといえるまでには成長していません。日本ではさらに導入率が低いわけですが、ここで我々と IBM のコラボレーションによってマーケットを醸成していくことができれば、それは面白いことになるのではないのでしょうか。そして、その先にはさらにエンタープライズ・アジャイルというキーワードも控えています。海外も含めてのマーケット拡大ができる可能性も、今、我々は見据えているのです」(平鍋氏)。

平鍋氏は8月、日本のエンジニアが世界へと情報発信することを目的に、カナダのトロントで開催されたアジャイル・カンファレンス「agile2008」にも参加し、「Gordon Pask Award」という賞を受賞しました。

「実はこれはジョーク交じりの賞でして、アジャイルの世界で人脈のハブとして“人知れず”多大な貢献をし

た人物を表彰するアワードなのです。実は私も Gordon Pask という人を知りません。ある意味触媒のような活躍と言うのでしょうか。しかし私自身とてうれしい受賞でした」(平鍋氏)。

平鍋氏によると、アジャイルの考え方はひとまとめに定義、体系化して他人に渡すことができるものではありません。人が自らの体験を踏まえて自分の言葉で伝えることで、初めて深い理解を得られるというアジャイル開発。平鍋氏と熊谷氏、そしてチェンジビジョン社は今後も「アジャイル」「見える化」を通して世界を視野に入れた飛躍を続け、IBM もその横で同じ道を歩んでいくことでしょう。

## チーム・コラボレーションの 共通プラットフォームを目指して



日本アイ・ビー・エム株式会社  
ソフトウェア事業  
ラショナル事業部長  
渡辺 公成

以前、アジャイル開発は日本のお客様からネガティブにとらえられていたこともあり、特に大規模開発の開発チームが地理的にも分散された環境で適用するには不向きと考えられてきました。

しかし、現代のように変化が激しい世の中において、それを支える IT システムの開発には、アジャイル開発に代表される適応型開発が不可欠になっています。

IBM は 2006 年より Jazz プロジェクトを立ち上げ、大規模分散開発には不向きと考えられてきたアジャイル開発をツールによってサポートする方法を模索検討してきました。

今年 6 月にはその第一弾製品として Rational Team Concert をリリースし、いよいよその環境が整ったことを機に、IBM 社内の大規模プロジェクトでアジャイル開発を適用し、その有効性を実証してきました。

今回は、日本での Rational Team Concert 最初のユーザーでもあるチェンジビジョン社の取り組みをご紹介させていただきました。

これからも、日本におけるアジャイル伝道師であるチェンジビジョン社のような企業とともにアジャイル開発の普及に努め、お客様によりよい開発のスタイルを提供していきたいと考えています。